

令和7年度  
第48回 栃木県少年の主張発表  
県大会記念文集



主催 栃木県青少年育成県民会議  
栃木県・栃木県教育委員会  
独立行政法人 国立青少年教育振興機構  
共催 栃木県更生保護女性連盟

# 目 次

県大会の様子	2	
開会挨拶	栃木県副知事 北村 一郎	4
次 第	5	
発表文		
最優秀賞		
月か太陽か	作新学院中等部	3年 小林 心結 ..... 6
優秀賞（発表順）		
心を込めて	栃木県立矢板東高等学校附属中学校	3年 田中 里彩 ..... 7
私にできること	芳賀町立芳賀中学校	3年 高久 桃 ..... 8
命を守る力になりたい		
一今できることから	宇都宮短期大学附属中学校	3年 繩田 美叡 ..... 9
奨励賞（発表順）		
もう一つの言語	大田原市立大田原中学校	3年 大槻 万結 ..... 10
世界へと繋ぐ	真岡市立真岡西中学校	3年 田中 真央 ..... 11
二十一世紀を生きる私たちへ	鹿沼市立東中学校	3年 米澤夢愛亜 ..... 12
地域のために行動する心	栃木市立東陽中学校	3年 荒川 榮睦 ..... 13
「今」を大切に生きよう	宇都宮市立陽西中学校	3年 佐々木美瑠 ..... 14
次の未来に向けて	佐野市立北中学校	3年 櫻井 智弘 ..... 15
有り難うの心	那須町立那須中学校	3年 大森 春音 ..... 16
国の壁を越えて	栃木市立栃木南中学校	3年 小林 柚輝 ..... 17
ありのままの自分	佐野市立城東中学校	3年 マハラジヤンでしゅな ..... 18
当たり前という幸せ	下野市立南河内第二中学校	3年 小池 杏奈 ..... 19
自分らしく生きる	那珂川町立小川中学校	3年 板橋 璃空 ..... 20
人生はビュッフェ	鹿沼市立北中学校	3年 野口 聖香 ..... 21
結果発表・講評	審査委員長 永井 高穂	22
高校生ボランティア感想		23
大会の概要		25
今年度の実施状況		27
これまでの県大会		28
県大会歴代最優秀賞		29
[参考] 第47回少年の主張全国大会 内閣総理大臣賞		30

※栃木県更生保護女性連盟から県大会発表者全員と高校生ボランティアに記念品として図書カードが贈呈されました。また、栃木県と包括連携協定を締結している大塚製薬株式会社からは、発表者と高校生ボランティア、宇都宮少年少女合唱団に商品の提供がありました。

# 県大会の様子



発表者受付の様子



開会式の様子



副知事挨拶



ミニコンサート（宇都宮少年少女合唱団）



永井審査委員長による結果発表・講評



最優秀賞 小林 心結さん  
(作新学院中等部)



優秀賞 田中 里彩さん  
(栃木県立矢板東高等学校附属中学校)



優秀賞 高久 桃さん  
(芳賀町立芳賀中学校)



優秀賞 縄田 美叡さん  
(宇都宮短期大学附属中学校)



奨励賞授与  
(代表 大槻 万結さん)



記念品授与  
(代表 田中 真央さん)



入賞者の皆さん

# 開会挨拶

栃木県副知事

北村一郎



第48回栃木県少年の主張発表県大会の開催に当たり、主催者を代表して一言御挨拶を申し上げます。

本大会は、豊かな感性を持った中学生が、様々なテーマについて深く考え、自分の言葉で表現することで、若者の誇りと自主性を育み、社会の一員としての意識を高めることを目的として開催しており、今年で48回目を迎える歴史ある大会です。本大会に先駆けて開催された地区大会では、県内の中学校から選び抜かれた代表が参加し、すばらしい発表が繰り広げられたと伺っております。

発表者の皆さんには、本大会に応募するために、学校生活や家庭生活、社会の様子を見つめ直し、様々な体験を通して感じている思いや願いを、率直に自分自身の言葉でまとめられたのではないかと思います。本日、このステージに立たれる16名の皆さんには、各地区の中から選ばれた代表です。発表を控え緊張しているかもしれません、日頃の練習の成果を存分に發揮し、自信と誇りを持って堂々と発表していただきたいと思います。

さて、県では「とちぎ青少年プラン」に基づき、「心豊かでたくましい とちぎの青少年の育成」を目指し、家庭、学校、職場が一体となって、「とちぎの子ども育成憲章」や「家庭の日」普及啓発などに取り組んでいるところです。御来場の皆様には、青少年の思いや考え方をしっかりと受け止めていただき、本県の未来を担う青少年の健やかな成長に向けて、それぞれのお立場での御支援を賜りますようお願いいたします。

結びに、御多忙の中御出席いただきました御来賓の皆様をはじめ、共催者としてお力添えをいただいております「栃木県更生保護女性連盟」様や審査委員の皆様、そして、熱心に御指導いただきました先生方など、本大会の開催に当たり御尽力いただきました多くの関係者の方々に心から感謝を申し上げ、挨拶といたします。

# 第48回栃木県少年の主張発表県大会 次第

令和7年9月20日(土) 栃木県総合文化センターサブホール  
司会 鶴田 一遙 (栃木県立宇都宮女子高等学校2年)  
横塚 彩芽 (栃木県立佐野東高等学校2年)  
佐藤 凪紗 (文星芸術大学附属高等学校1年)  
高崎 愛梨 (栃木県立宇都宮女子高等学校1年)  
滝田 帆香 (栃木県立宇都宮女子高等学校1年)  
山本 芽生 (栃木県立栃木女子高等学校1年)  
蛇澤 奏太 (栃木県立宇都宮高等学校1年)

## 1 開会式 (13:00 ~ 13:10)

- (1) 主催者挨拶 栃木県副知事 北村 一郎  
(2) 主催者・共催者・来賓・審査委員紹介

## 2 発表 (13:15 ~ 15:00) (途中休憩10分)

## 3 宇都宮少年少女合唱団ミニコンサート (15:10 ~ 15:40) 審査委員会 (15:10 ~ 16:00)

## 4 表彰式 (16:00 ~ 16:30)

- (1) 審査結果発表・講評 審査委員長 永井 高穂  
(2) 表彰  
授与者 最優秀賞 栃木県生活文化スポーツ部長 中村 和史  
優秀賞 栃木県教育委員会教育次長 大高 栄男  
奨励賞 栃木県青少年育成県民会議理事長 千金楽 宏  
記念品 栃木県更生保護女性連盟会長 伏木 ミサ子



## 最優秀賞

# 月か太陽か

作新学院中等部 3年

小林心結



「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光に依って輝く病人のやうな蒼白い顔の月である。」

「なんて悲しい、だけど何と力強い言葉なの。」歴史の授業でこの言葉と出会い、私はその意味について深く考えるようになりました。これは大正時代に、女性差別からの解放を訴えた、平塚らいてうの言葉です。「蒼白い月？病人のような？」皆さんはこの言葉にどのような印象を持ちますか。

昔、女性は政治に参加する権利がない、また十分な教育を受けられないなど、男女が不平等であったことは、学んで知っています。「男尊女卑」という言葉があったように、男性よりも劣っていると、決めつけられた時代もあったのです。

でも、私は今、男子も女子も同じ教室で、とても楽しい学校生活を送っています。みんなが夢に向かって一緒に勉強したり、ボランティア活動に取り組んだりしています。私は様々な活動を通して、地域や社会に貢献したいと思うようになりました。昨年防災士の資格を取りました。女性の活躍は地域力の向上につながります。しかし、混乱時には女性が被害に遭う危険性が高いことも知っています。「女性ばかりが、なぜ嫌な目に遭わなければならないの？なんだか腹立たしい。昔の人は我慢できたの？そんなに女性は弱いものなの？」そんな私の気持ちに太陽の光を射してくれるような、女性を見つけました。

その人は、私と同じ栃木県出身の大関和さんです。関東大震災の時、何よりも人命救助を優先させるように訓練された看護師「トレインドナース」として多くの被災者を守りました。心のケアや地域への支援など、看護だけではない彼女の災害対応は、現代の防災士の役割と同じであり、私の憧れる女性の一人です。男女差別が根強く残る時代に、「命を扱うのは金儲けの仕事、糞尿だらけの汚れた仕事」とひどい差別を受けながらも、女性が公の場で働くことの価値を高めました。彼女の力強い思いが、多くの

人の心を、動かしたのです。どんな場所にいても、大きな舞台で活躍できることを、和さんは証明してくれました。栃木の歴史や文化を誇りに思う気持ちが、自分の可能性を広げる原動力に変わったのです。

私は、栃木県防災士会に所属しています。災害時に避難所を運営することを学ぶ「HUG」や、防災情報の共有などの活動をしています。そのような活動を経て、県の垣根を越えた同世代の学生の、防災チームを立ち上げたいと思うようになりました。「県の垣根を越える。」そう思うようになったきっかけは、学校での様々な社会貢献活動を通じ、遠く離れた誰かを思い、寄り添うことの大切さを教えてもらったからです。部活動で学んだ手話や点字を役立てながら、女性の目線を生かした、誰一人取り残さない活動に取り組みたいです。

女性、男性、それぞれの目線があるからこそ、気が付くことがたくさんあるはずです。女だから、男だからという性別の固定観念に縛られず、女性も男性も様々なことにチャレンジできるチャンスがある。それが真の男女平等な社会なのではないでしょうか。一人の「人間」として、何ができるのかを考えていかなければならぬ時代だと思います。だからこそ、自分が埋もれてしまってはいけない。

長い年月を経て、私の手元に届いた平塚らいてうの言葉。冒頭に続いて述べられていたのは、女性の立場を取り戻さなくてはならないというものでした。それは私の心を、ぱっと鮮やかに照らしました。彼女の言葉を借りるならば、「あなたは月ですか、それとも太陽ですか？」私は太陽になりたい。どんな人にでも、温かく柔らかな、そして力強い陽の光を注げる、愛のある女性に私はなりたい。

元始、女性は実に太陽であった。そして、今もなお、自ら輝くまぶしい太陽である。

# 心を込めて

栃木県立矢板東高等学校附属中学校 3年

田 中 里 彩



「めぐりあいてみしやそれともわかぬまにくもが  
くれにしよわのつきかな」

私は今、小倉百人一首を使った競技かるたに熱を注いでいます。この和歌が歌われた頃は今とは違い、仲の良い人と気軽に会ったり、話したりすることができない時代でした。和歌は相手に自分の想いを伝える、重要な役割をしていたのです。たくさんの想いが込められた三十一文字の和歌を見ると、目の前に壮大で豊かな情景が広がります。たった三十一文字。されど三十一文字。和歌に込められた溢れんばかりの想いが千年の時を越えて、今に繋がっています。

私が百人一首に出会ったのは中学生になってからです。魅力を知ってどんどんのめり込み、中高合同の校内百人一首かるた大会では仲間と力を合わせて優勝することができました。今では地域のかるた会に毎週通っています。かるた会にはお年寄りから小さな子まで、かるたが好きで強くなりたい人たちが集まっています。彼らと交流を深める中で、私は言葉のもつ力の偉大さに気付きました。「頑張ろう。」「絶対に勝つ。」団体戦の前に飛び交う言葉。一文字一文字に心がこもった言葉。そんな言葉のやりとりによって、自然とやる気が湧いて全力で試合に取り組みました。簡単に人と繋がって会話できる今だからこそ、私たちが重要視すべきなのは「言葉一つ一つに想いを乗せること」かもしれません。

平安時代。和歌の限られた文字数に織り込まれた想いは、私たちの想像をはるかに超えるものだったと思います。しかし、「めぐりあいて」の歌が詠まれて約千年の時が経った今、私たちのコミュニケーションはどうでしょうか。科学が発展し、様々な電子機器に囲まれて生活しています。SNSによって昔では考えられない程、気軽に人と繋がっていられます。しかし、私は、言葉に想いを込めるという機会が少なくなっているように思います。

私は携帯電話を手に入れてから間もなく、小学校

の頃の友達とSNSを繋ぎ、久しぶりに遊ぶ約束をしました。その際、私は待ち合わせ場所や時間などをじっくりと考え、慣れない手つきで四苦八苦しながらメッセージを送りました。しかし、返事は「りょ」の一言だけ。意味が分からず、姉に聞いてみたところ、それは「了解。」を略したものだったそうです。

「了解」という言葉を略した「りょ」。何とも効率的で合理的。携帯電話での気軽な会話から、言葉はどんどん簡略化されています。「タイパ」という言葉が生まれるほど、効率化を求める今の時代には必要なことなのかもしれません。しかし、簡略化されたことにより、大切なことを言いたくても相手には十分に伝わらないこともあるかもしれません。私は、そんな寂しさと虚しさに、胸が締め付けられました。日々、大量に行き交う言葉たち。果たして、本当に伝えたい想いはその言葉に込められているのでしょうか。コミュニケーションを密にとっているようでも中身はスカスカ。一言で軽く済ませてしまうのは悲しい。私たちは、心に孤独を生み出すような冷たいコミュニケーションをとっているだけではないのでしょうか。

日本語には長い歴史があり、表現が豊かです。そんな日本語を大切に思い、言葉に心を込める。誰もが毎日使うからこそ、丁寧に想いを織り込んでいくべきではないでしょうか。

私は、今日も畳の上に並べられた和歌と向き合います。はるか昔に詠まれた和歌に込められた想いや情景を頭に浮かべながら。たくさんの想いが込められた三十一文字の和歌のように、言葉を大切にして歩んでいきたいです。

# 私にできること

芳賀町立芳賀中学校 3年

高久 桃



「あなたの名前は何ていうの？」

皆さんは家族にそう言われる日が来るかもしれないと想像したことはあるだろうか。

私の家には今年95歳を迎える曾祖母がいる。名前はイワさん。イワさんは長い間認知症を患っている。母が嫁いできた時には始まっていたと言うから、もう15年以上になる。イワさんのおじいさんが、イワさんのことが可愛くて自分と同じ名前を付けたと聞いた。女なのに恥ずかしいから、イワ子ってことにしてるんだよと私が教えてくれたことがあった。私が小さい時はイワ子さんの症状も軽くて私のことも可愛がってくれたし、「桃ちゃん、桃ちゃん」と名前を呼んでくれた。でも、今は祖母に「あの子はどこの子?」と聞き、私には「あなたの名前は何ていうの?」と聞く。祖母のことは自分の姉だと思っている。もう慣れたことだけれど、やはりカオスな状況だ。感情もコントロールできなくなって叫び、被害妄想で怒る。色々な事が少しずつできなくなって、身近な人も忘れていく。認知症って寂しいなと思う。忘れられた私だって悲しかったし、実の子である祖父はもっと辛かっただろう。それでも家族は介護と向き合っていかなければならないのだ。

日本で認知症の方は500万人以上。今後も増え続ける見込みだ。2025年問題という言葉を耳にしたことがあるだろうか。今年、日本の人口の最も多い世代である団塊の世代が75歳を迎え、75歳以上の方が2千万人を超える。様々な問題の中の一つにイワさんのように介護が必要な人に対し、介護職の方は大幅に足りない。そうなると、仕事をしながら介護をする人が増え、手厚い介護が必要なら仕事を辞めなければならない。どんなに大好きな仕事でも、人の命には代えられないから。

祖母は介護の仕事をしていたが、イワさんの認知症が重くなって数年前に仕事を辞めた。それまで母も面倒を見ることがあった。しかし、何をどうすれば良いか知らない母は、自分は無力だと言っていた。知らない間に家を出てしまって、子ども達が教えてくれて助かったことがある。排泄に失敗した時、古いタオルをとっておくと便利だって祖母に聞いて

おいたおかげで助かったこともある。全て母の体験だ。こんなこと誰が教えてくれるの?いざという時ではもう遅い。数十年後に誰もがきっと必要になるのに、学ぶチャンスは限られている。

介護はキツく汚いイメージがある。確かに介護をしていた祖母でさえ大変そうだし、粗相をすれば悲しいし臭い。段々に皆と同じものは食べられなくなり形の無くなった食べ物はなんとなく不気味に見える。でもそれは介護を知らないからではないだろうか。

昨今、ヤングケアラーという言葉が世の中に浸透してきた。それだけ若くして介護せざるを得ない人も少なくない。介護を学ぶチャンスがないなかで、彼らはどういうふうに介護の問題を乗り越えているのだろうか。どこに相談すれば良いか、誰がどこまで助けてくれるのか、分からぬのではないだろうか。そして何より、自分の介護の仕方に不安を抱えているのではないだろうか。だから、もっと介護について教えてくれませんか?私達みんなに。学校で、社会で。大切な家族のこれからのために、私たちに何ができるか。介護をしている人への支援が足りないなら、どんな世の中にしていくべきなのか、教えてください。介護を知る人が増えれば、もっと助け合えると信じている。

最近のイワさんは、寝ている時間が長い。でも、時々柔らかいシワシワの手で握手を求める。そしてその握手は思った以上に力強いのだ。なぜなのかなずっと不思議だった。でも小さな従兄弟が母と手をつなぐ姿を見てハッとした。繋がってみたいんだよね。安心したいんだよね。いろいろなことが分からぬって、不安だよね。私も幼い頃不安な時は母の手をギュッと握んでいた。だから、イワさんの気持ちが分かるよ。私はイワさんが物事を忘れていく分、私はイワさんを覚えている。何度もって言うよ。「私の名前は桃だよ。イワさんのひ孫なの。よろしくね」って。だから安心してね。イワさんを安心させること。それだけが、介護を知らない私にできること。

# 命を守る力になりたい —今できることから

宇都宮短期大学附属中学校 3年  
繩田 美叡



「命とは何だろう？」そう問いかけるような出来事が、私の人生に静かに、深く、入り込んできました。

「おじいちゃん、手術を受けることにしたんだって」、祖父の手術の話を聞いたとき、私の心は不安と恐怖で埋め尽くされました。

学校であったことを話すと、いつも優しく笑ってくれる祖父。長年心臓の病を抱え、より良い余生を求めて昨年冬、祖父は新しい手術法に挑むという大きな決断をしました。84歳という高齢でありながら、自分の体や病気について徹底的に調べ、医師と何度も話し合い、納得した上で手術に臨んだのです。弱音ひとつ吐かず、まっすぐ前を向くその姿に、私は強さと覚悟を見ました。そして私は思ったのです。「私も祖父のように、命と真剣に向き合える人間になりたい」と。医療の進歩は人々に希望を与え、「生きたい」という願いを力強く支えていることを、私はこのとき、心から実感しました。

それから半年後のこと、私にとってもう一人の大切な人は、若くしてがんを患いました。その知らせを聞いたとき、私は、胸が締め付けられる思いでした。しかしその人は、私が医学に興味を持っていることを知ると、病状や治療について包み隠さず話してくれたのです。不安の中で告知を受けた時の動揺も、治療法を選ぶ葛藤も、そして、ロボット手術がもたらす希望、後遺症と向き合う勇気。夜も眠れないとほどだったというその恐怖を、私を真っ直ぐに見つめて語るその姿から、私は「生きる」ということがいかに尊く、簡単には守れないものであるかを、心の一番奥底で感じ取りました。一人ひとりの命、それぞれの大切な命だからこそ、支える側に立ちたいと強く思いました。

そんな中、私は外科医体験のセミナーに参加する機会を得ました。超音波メスや内視鏡の操作、縫合の練習、救命救急の実習。何もかもが私にとって未知の領域で緊張の連続でしたが、何より私の心に響いたのは、指導してくれた若い医師たちの言葉でした。

た。「失敗を恐れず努力を重ねることが、成功への唯一の道なんだ」、「夢は諦めなければ必ず叶う」。この体験は私にとって忘れられないものとなり、医療の道を目指す思いをさらに強くしてくれました。

このセミナーをきっかけに、「今の私にできることは何か」を考えるようになりました。私はその日学んだAEDの使い方や心臓マッサージの仕方を忘れないように繰り返し復習し、設置場所も意識するようになりました。

新聞によれば、2022年に栃木県で市民がAEDを使った事例は、心肺停止患者のうちわずか1.18%、28人だけでした。AEDを使えば助かる可能性は4倍に上がり、一ヶ月後の生存率も50%になるというのに、です。また、関東で唯一、栃木県だけが高度救命救急センターを設置していないことも知りました。多くの命を救うには、医師だけでなく、私たち市民一人ひとりの意識と行動が必要だということを強く感じています。

さらに、医療の道を目指すうえで、今学んでいることのすべてが力になると気づきました。人体を学ぶ生物の分野、相手にわかりやすく伝えるための国語、世界とつながる英語、古今の社会問題に向き合う地歴など、無駄なものはありません。日々の友人ととの何気ない語らいも、思いやりや信頼を育む貴重な時間です。

私が昨年、大切な人たちが病と闘う姿を目の当たりにし、命の重みと真剣に向き合った時間も、私の人生の大きな糧となるでしょう。私のかけがえのない二人は、無事手術を乗り越え、それぞれの趣味を楽しむまでに回復しています。

これから的人生で、私は多くの人々と出会い、支え合い、時にぶつかりながらも進んでいきます。患者さんが直面する痛みや不安、命を守るために闘いを目の当たりにする時、私はその瞬間に自分の力を最大限に発揮できるような医師になりたい。

私たちの可能性は無限大なのです。

# もう一つの言語

大田原市立大田原中学校 3年

大 楓 万 結



あなたは、私の声を聞くことができますか。

世界におよそ4億7千万人いる聴覚障害の方々は、私が発する声をはっきりと聞き取ることができません。世界中の多くの人々はコミュニケーションツールとして「言語」を用いています。私が外国の方と話をするのに英語を使うように、聴覚障害の方と話をするのに使う言語が「手話」です。

私が初めて手話を出会ったのは、小学3年生のときでした。当時、合唱を始め、音楽に楽しさを感じた私は、手話をしながら歌うことが好きになりました。だから、今年に入って「市役所で『初めての手話講座』があるらしいよ」と母が教えてくれたときは、すぐに申し込んでもらいました。そして講座初日、今までに考えもしなかった衝撃的なことを知ります。ろうあの方々は、生まれつき音を聞いたことがないので音楽というものを理解するのが難しい。だから、歌いながら手話をしているのを見ると嫌な思いをする人もいる、というのです。私は今まで、手話を使って歌うことで聴覚障害の方も音を感じることができますと考えていました。

さらに、日本には、中途失聴や難聴の方々が使う「日本語対応手話」と、生まれつき聞くことのできないろうあの方々が使う「日本手話」の2種類があることも知りました。例えば、「雨が強い」を手話で表したいときに、「日本語対応手話」では、「雨」「が」「強い」ですが、「日本手話」では「雨強い」と表現します。日本語対応手話は、話し言葉と同じ言葉の順番で表現しますが、「日本手話」は、日本語とは違う言語の特徴をもっています。このことを知らなければ、正確にコミュニケーションをとることができなくなってしまいます。

毎週火曜日の夜、1時間30分という長いようで短い時間。講座では「日本手話」を学んでいます。イラストや物を使いながら、先生の手話をまねて覚えます。手の形や動きだけでなく、その時の口の形や眉の上下などの表情も大切な文法の一つです。日本

手話を学ぶときは、日本語では考えず、手話で理解することも大切なことです。

このようなことを意識しながら手話を使って自分の気持ちを相手に伝えられるようにします。腕が疲れたり、指がつりそうになったりしながらも、20名の生徒の方々と一緒に楽しく学んでいます。この講座には「講習中は声を出さない」というきまりがあります。先生はろうあ者で、私たちの会話を聞くことができないからです。先生は「手話を理解することより、手話を使っている人の気持ちを第一に理解してほしい。」また、「『日本手話』だけでなく『日本語対応手話』もあり、それぞれに寄り添った対応が必要だということを知ってもらいたい。」とおっしゃっていました。

現在の社会は、自分ファーストの考え方多いため、相手の気持ちを考えられる社会になってほしいと思います。先生は、私たちの声は聞こえないけれど、私たち一人ひとりに丁寧に教えてくれる、本当に素敵なお先生です。今では、毎週火曜日が来るのが楽しみで仕方ありません。

「みんなちがってみんないい」。当たり前のように、気づくことは難しいけれど、この世界に生きている人はみんな違います。全ての人がお互いのかけている部分を補いながら、尊重し合える世界になってほしい。そして、誰もが支え合い、つながり合える社会になってほしい。私はそう願っています。

あなたには私の声が聞こえますか。

# 世界へと繋ぐ

真岡市立真岡西中学校 3年  
田 中 真 央



私の母はフィリピン人、父は日本人です。私はよく友達に、「純粋な日本人に見える」と言われます。その言葉を聞く度、いつも安心している自分がいました。

物心ついたときから私はフィリピンと関わりがありました。日本ほうが長く在住しています。慣れているのは日本であり、フィリピンの印象は正直あまり良くありませんでした。毎年のように訪れます。ポイ捨てが当たり前のように行われ、町中の匂いが私にはきつく感じられました。フィリピンの人たちもなんだか馴れ馴れしく、怖く感じられました。

そんな国の血が入っているなんて。私にとってそれは「恥ずかしいこと」でした。授業や友達との会話の中で、海外に関する話題が出ると、なんとなく加わりたくない。「自分がフィリピン人でもある」という事実が認められずにいたのです。

私が小学校の中頃からコロナが流行しました。それを機に、私はフィリピンに行くことがなくなりました。私にとって幸せな日々が続きました。同時に、タガログ語を話すことが少なくなっていました。

小学6年生の夏休み。久々にフィリピンに行くことになりました。訪れるたびに仲良くしてくれた親戚や友達、日本にはないたくさんのことについて触れに行く。気が付くと、そこには嫌悪感ばかり抱いていた私ではなく、久しぶりに訪れるフィリピンを楽しみにしている私がいました。飛行機を出てすぐに、強い日差し、特有の匂い、飛び交うタガログ語が私を出迎えました。しかし、よく見ると、町には以前のようなポイ捨てが見られなくなり、交通設備が整っていました。スラム街だと思っていた地域もきれいに整備され、私はとても驚きました。

そこから約1か月、フィリピンに滞在しました。白い砂と水色のビーチ。トライシクルという乗り物に乗って感じる風。明るく元気に接してくれる親戚たち。日本とかけ離れていて嫌だったものが、その

時なぜか全て愛おしく感じられたのです。「町がきれいに整えられたから」、そういった変化だけが原因ではありません。母の故郷であるフィリピンのもつ良さに、日本とは違う、この国だけがもつ魅力に私は気付くことができたのです。

日本に帰ってくると、今まで無理やり日本語で会話をしてきた母とも頑張ってタガログ語で会話するようになりました。フィリピン料理を作る母の手伝いをして、自分から積極的にフィリピンに触れました。「フィリピンの血が入っていることが恥ずかしい」、幼い頃からそんな風に思っていたけれど、いつの間にか「私は特別」と捉えるようになり、「私には日本とフィリピンの血が流れている」ということを堂々と言えるようになりました。

フィリピンは開発途上国で、伸びしろがまだまだあります。これからもっと変化していくでしょう。そんなフィリピンを、血を紡いでいる一人として強く応援したいと思います。日本とは違うことばかりです。しかし何より、たくさん的人に、母の、そして私の故郷の魅力をもっと知ってほしいと思います。

私もいつか母のように、他国に滞在してみたいです。そこでは、きっとその国にしかない魅力に出会えると思うからです。そして、他の場所からしか見えない、自分の故郷の魅力にもっと気付けると思うのです。

# 二十一世紀を生きる私たちへ

鹿沼市立東中学校 3年

米澤 夢愛亜



「クラスで一人だけ満点がいます。」いやな予感がした。呼ばれたのは自分の名前。クラスは拍手喝采。友達からの称賛。その時、感じたことのない複雑な気持ちになった。

ある日、塾で出された数学の課題。提出期限が迫り、焦る気持ちがあった。やらなければいけないことはわかっていたが、部活に夏期講習の毎日が続き、面倒だという気持ちが抜けなかった。「そうだ、生成AIを使ってみよう。」そう思い、スマートフォンで問題を読み込み、解かせてみた。50分で解くはずの問題がたったの10分で終わり、大満足の私は、見直すこともなく、翌日の塾で提出した。課題が返される前に先生が言った。「クラスで一人だけ満点がいます。」自分の力ではない、なんて言えるはずがなかった。褒められれば褒められるほど、自分の中にうしろめたさが募っていった。

このもやもやした気持ちを、意を決して双子の兄に相談してみた。「もうAIなんて使わない。」ふと呟いた私に兄は一言。「夢愛亜はそもそもAIを使ったんじゃないくて、AIに使われたんだ。」と。意味が分からぬ。あの時私は、AIが出した答えを疑うことなく書き写した。答えが正しいか考える時間はあったが、AIの出した答えに従った。私は確かにAIを使ったのだ。兄に突き付けられた言葉の意味を考えずにはいられなかった。

私たちが生きるこの時代は、多くの情報があふれている。新聞やテレビの報道だけでなく、SNSの投稿、動画サイトのコメント、さらにAIが私たちに与える答え。スマートフォンを開けば、誰かの意見が唯一の正解かのように目に飛び込んでくる。私たちには、「誰かの答え」を自分の答えであるかのように錯覚してしまう危うさがある。しかし、「誰かの答え」に自分が納得していれば、それは「自分の答え」になるのかもしれない。なぜなら、納得するまでの過程で、自分の頭で考えているからだ。「AIに使われた。」という兄の言葉の意味が分かった

気がした。与えられたものを、何も考えずに受け取り、あたかも自分が生み出したかのように使ってしまった私の危うさを指す言葉だったのだ。導き出された「答え」が本当に正しいのかどうか考え、判断すること。そうすることで初めて「AIを使った。」と言えるのではないか。

思い返せばこれまでにも、「自分の頭で考えて選ぶ」という経験をしたことがあった。小学6年生の時、双子の兄と一緒に中学受験をした。勉強が得意だった兄の合格は確実だったが、私にとっては大きな挑戦だった。私だけが、本命だった中学校の合格をつかむことができなかつた。第二志望の中学校に行くのか、公立中学校に行くのか。放課後、遊びを我慢し、努力した時間。「受験に失敗したから来た。」と思われるのではないかという不安。いつも応援してくれた家族の存在。様々な思いが頭の中を巡る。「せっかく受験したんだから……。」「中高6年間が保証されていいじゃない。」周りからの声に、さらに頭を抱えた。公立中学校に行ったら、すべてが無駄になてしまうのか。でも、そうは思いきれない自分もいた。どうすることが正解なのか、悩んでも悩んでも、誰も教えてくれなかつた。受験を勧めてくれた母は、「自分の納得できる方を選びなさい。」と言つた。「高校受験でもう一度挑戦したい。」自分の気持ちに従い、私は公立中学校を選んだ。

あの時、葛藤しながらも自分で選択したことに、今自信をもてているのは、自分の思いを見失わず、その声に従つたからだ。

情報があふれ、答えが簡単に手に入る時代。AIを使えば、答えがすぐに得られる時代。私たちは、常に正しそうな誰かの声に囲まれて生きていくだろう。その中で、私たちは自分にとっての最善を選択していく必要がある。二十一世紀を生きる私たちにとって、大切なのは、自分の頭で考え、自分の意思で選び取ること。自分の力で未来を切り開いていくために、私たちは自分自身で考え続けるのだ。

# 地域のために行動する心

栃木市立東陽中学校 3年

荒川 榮陸



鳴り響く笛と太鼓の音。代々受け継がれてきた舞と、きらびやかな衣装。そして能面が神聖な空気を漂わせる舞台。境内では、子供たちが楽しげに遊び、その姿を穏やかに見守る大人たち。そんな幅広い世代が交流を深めるこの空間が私は大好きです。

私の住む栃木市惣社町には、1800年の歴史をもつ大神神社があります。奉納される太々神楽は、京都吉田流を受け継ぎ、質素ながら力強く、この地域の象徴的存在となっています。演目の後に撒かれるお餅やお菓子を大人も子供も夢中で拾い、惣社町の子供はみんなこの神楽を見て育ちます。私も幼い頃、神楽のまねをしてよく遊んでいたそうです。

神楽を奉納するのは、大神神社神楽保存会。地域の有志が集まり、練習を重ね、春と秋のお祭りなどで奉納しています。もちろん見返りはありません。保存会に入ったからといって何か良いことがあるというわけでもありません。しかし、保存会の一員である父は、

「みんなで一つの舞台を創り上げるのが楽しいし、地域の伝統を受け継ぎ、地域の笑顔を増やすことにつながれば……」

と笑っていました。幼かった私は、忙しく過ごす父が、なぜ神楽にそこまで時間と心を注いでいたのか、理解できませんでした。

神楽は、舞台で舞う人だけでなく、音を奏でる人、衣装を整える人など、多くの手によって支えられています。しかし今、その「手」が足りないのです。太々神楽は深刻な扱い手不足に直面しており、奉納を断念せざるを得ない演目も出てきています。このままでは、惣社町を象徴する神楽が、なくなってしまうかもしれない。そんな話を聞いた私は、一昨年の秋、神楽の存続に少しでも力になればと思い、保存会に入りました。神楽殿で太鼓をたたくようになってからは、その活動が本当に助けになっているのだと思うと気恥ずかしくもあり、大きなやりがいを感じています。あの頃は理解できなかった父の心が、今やっ

と分かるようになってきました。「自分を育ててくれた地域の宝を後の世代にも伝えていきたい。」私は、地域のために行動できる父を心から尊敬しています。

昨年元日に起きた能登半島地震。「自分にできることはいか」と考え始めた頃、学生団体レインボーの存在を知りました。それをきっかけに私は、学校で義援金を募り、能登に送ることができました。

栃木市の中学生が立ち上げたこの団体は、地域の中高生が主体となり、防災・減災や子供たちの学習支援・居場所づくりなど、SDGsに関わる幅広い活動を行っています。私も今年の四月、仲間に加わりました。

最初の活動は、水ヨーヨー釣りの屋台を通じた収益を、地域の子ども食堂に寄付することでした。水ヨーヨーを買った子供も、寄付を受ける子ども食堂の方も関わってくれる方、みんなが笑顔になり、地域が元気になる活動だと感じました。何より、たくさんの笑顔を見た私たちが笑顔になり、元気をもらいました。

今、私たちの地域は、様々な課題に直面しています。これから地域を担う私たち中学生に、何ができるかを考え、誇りをもって行動することが大切です。

地元の食材を味わい、伝統の祭りに関わる。そんな小さな行動が、地域を支え、つなぎ、育てていきます。誰もが何かできることがあるのです。地域の未来のために行動する心を、仲間と分かち合いながら育み続けたい。そして、共に踏み出す一歩が、明るい未来への道となるよう、これからも活動を続けていきます。

# 「今」を大切に生きよう

宇都宮市立陽西中学校 3年

佐々木 美 瑠



「すぐに忘れちゃって、ごめんね。」

祖母に会うたび、いつもそんな風に言われます。

離れて暮らす祖母は、軽度の認知症を患っています。会うたびに「みるちゃんは何年生だったっけ?」「どこの高校に行くんだい?」と、同じ質問を一日に何度も繰り返します。

そのたびに、「ばあちゃん、バカだからすぐ忘れっちゃうんだよ。ごめんね。」と申し訳なさそうに笑う祖母。何度も同じことを聞かれると、正直イラしてしまこともあります。けれど、その言葉を聞くたび、私は胸が少し痛くなっていました。

先日、私の中学生活最後のバレーボールの大会がありました。祖母も応援に駆けつけてくれました。

ユニフォーム姿の私を見て、「立派になったねえ。」と、目を細め、応援席からずっと手を振ってくれていたと母から聞きました。

試合が終わり、祖母のもとに駆け寄ると、祖母は涙を流していました。

「よく頑張ったね、本当にすごかった。感動したよ。」

私の手を握りながら、涙で赤く染まった目で、何度も何度も「すごかったよ。」と繰り返す祖母の表情、声、あたたかな手のぬくもりを私は一生忘れないと思います。

けれど、数時間後にはその大会のこと、私の活躍も、祖母の記憶から消えていました。

「ばあちゃん、バカだからすぐ忘れっちゃうんだよ。」

祖母はいつものように少し悲しげな表情で言いました。

祖母だって、忘れたくて忘れているわけではないのに、本当はいつまでも覚えていたい、はずなのに、まるで何もなかったかのように忘れてしまう。

では、あの感動も、消えてしまったのでしょうか。「忘れる」ことは、すべてを無駄にしてしまうことなのでしょうか。

私はそうは思いません。

今の私は、そんな祖母の姿に切なさと同時に、愛

しさを感じています。そして、「思い出って何のためにあるんだろう。」と、考えるようになりました。

祖母はこれからも、たくさんのことを見失っていくでしょう。いつか、私の名前をも忘れてしまうかもしれません。でも、たとえ祖母の記憶から消えても、私の心にはしっかりと刻まれています。

私のために時間をてくれたこと。目を潤ませながら応援してくれたこと。一生懸命ほめてくれたこと。いつも優しく見守ってくれること。それらすべてが、私にとっての宝物です。

祖母は「昨日」を忘れてしまうけれど、今この瞬間は、確かに私と一緒に生きています。今、私が笑えば祖母も笑う。私が手を差し伸べれば、祖母もその手を取ってくれる。記憶が消えても、きっとずっと心は通い合うことができる。

だから私は、こう問い合わせたいのです。

「思い出」や「感動」は過去だけのものではなく、「今」を大切な人たちと一緒に生きた先にあるのではないかでしょうか。

私は、祖母と一緒に過ごす日々の中に、忘れられていく時間の中に、かけがえのない「今」と一緒に刻んでいきたいと思います。そうすることで、祖母の人生を私も受け継いでいけると信じています。

人は、過去の思い出にとらわれたり、未来の夢に焦がれたりするけれど、本当に大切なのは、「今この瞬間」を大切な人とどう生きるかではないでしょうか。祖母とのふれあいが、私にそのことを気づかせてくれました。

だから私は、誰よりも強く、こう伝えたい。

過去にとらわれず、未来を焦らず、「今を大切に生きよう。」「今」の積み重ねが、きっと人生を豊かにしてくれる。

私はこれからも、大好きな祖母と、そして私の大切な人たちと一緒に、「今」という時間を、全力で生きていきます。

あなたは、大切な人との「今」を、ちゃんと大切にできていますか。

# 次の未来に向けて

佐野市立北中学校 3年

櫻井智弘



夕方の踏切。その日は何かが違っていた。カンカンカン…と鳴り続ける音。下がったまま動かない遮断機。

私と友人は、不思議に思いその踏切を見つめていた。電車は来ていないが、遮断機は上がらず、警報器の音も止まらない。少し経つと、後ろには車の列ができていた。私たちは自然と目を見合わせていた。「どうしよう。」「このままでは危ない。」友達のその一言から、私たちは動き出した。

車の列はどんどん長くなっていく。運転手さんは、困り顔で外を覗き込み、焦る様子が見えた。私たちは、手を挙げて車を止め、一台一台に声を掛けた。「遮断機がトラブルで下がったままです。違う道を使って横断してください。」そう伝えると、驚いた表情をしながらも、多くの人が誘導に従ってくれた。

しかし、上手くいかないことも多かった。話し掛けても無視をしていく人。こちらの動きに全く反応せず、慌てて違う道に行き混乱を広げる人もいた。「中学生が何をしているのだ。」と言いたげな目もあり、心が折れそうにもなった。

その一方で、笑顔で「ありがとう。」とお礼の言葉を伝えてくださる人もいた。中には「手伝うよ。」と、私たちと一緒に車の誘導をしてくださった大人の方もいた。そうした言葉と行動が、私たちの背中を押してくれた。友人の一人は、家からホワイトボードを持ってきて、通行止めの案内を書いてくれた。自分の意志で、考え方行動する友人の姿は頼もしかった。

時間がどんどん過ぎていき、約1時間が経過した。もう日が落ちかけていたが、私たちは一人一人の運転手さんに声を掛け続けた。緊張もしたし、怖いとも思った。自分たちの行動で事故が起きてしまったら、勝手なことをしたと怒られたら、そんな不安が頭をよぎった。しかし、それ以上に「困っている人を放っておけない。」という思いが勝っていた。

その後、私たちの行動を知った先生たちが学校から駆け付け、「本当にありがとう。」と声を掛けてくださいました。その一言に、胸がじんわりと温かくなった。

この出来事は、私たちにたくさんのこと教えてくれた。一つは「中学生だから何もできない」というのは間違いだということ。私たちはまだ未熟で、知識も足りない。できることは限られているかもしれない。しかし、目の前の人を助けたい、という思いさえあれば行動できる。たとえそれが小さな力でも、動けば何か変わる。

二つ目は、自分の信じた行動を貫くことが大切だということ。世の中にはいろいろな人がいる。無視をする人もいれば、手を差し伸べてくれる人もいる。そのどちらも、その人の考え方であり、意味があるのだと思う。どんな反応があっても、私は自分が正しいと思った行動を信じたい。

私たち中学生にも、社会に貢献できる力はあるはずだ。もっと勇気を出して行動するべきだ。「できるかできないか」ではなく、「やるかやらないか」で判断したい。誰かが困っているとき、見て見ぬふりをするのではなく、自分にできることを考えて動く。自分から行動する勇気がこれからの社会には必要だと思う。あの踏切で過ごした数時間は、ただの「下校中のトラブル」なんかではない。私たちにとって、社会の一員として、「自分たちに何ができるか」を知る大きな出来事だった。

これからも私たちは、もっと声を挙げて行動していかなければならないと思う。誰かの役に立ちたい、誰かの不安を減らしたい。その思いを大切にし、立ち止まらずに、その一歩を踏み出す勇気を、これからも持ち続けたい。今回の経験で強くそう思った。

# 有り難うの心

那須町立那須中学校 3年  
大森 春音



皆さんは「起立性調節障害」という病気を御存知でしょうか？

起立性調節障害とは、私たちのような思春期に多くみられる病気で、起立時にめまいや動悸、失神などが起きる自律神経の機能失調です。特に午前中に強い倦怠感が襲ってくる病気で、天気や気圧、気温などにより症状が左右されることもあります。

中学校1年生の秋。帰宅時間が早まり自宅での時間が長くなるにつれて、私の生活リズムは乱れがちになりました。徐々に、その症状が出始めたのです。

最初は単なる寝不足による体調不良だと思っていました。しかし症状は悪化する一方。「周りの人には迷惑をかけちゃだめだ。」自分の力でどうにかしようと思うようになりました。しかし解決には至りませんでした。両親や祖父母は、毎朝体調不良を訴えながら午後には復調する私に、心配しながらもいだちを感じながら接していたと思います。

先の見えない状況に、焦りと不安が増していき、いつしか自分で自分を責めるようになりました。比例するように、体調はさらに悪化していきました。

「誰かに相談したい…。楽になりたい…。」冬を迎えた私の心の中に、声にならない悲痛な思いが渦巻きます。それでも「人に迷惑をかけてはならない」という思いが頭の中に常に居座り続け、その思いを他人に悟られまいと必死にもがき続けました。

冬休み。年末最後の部活動。誰にも気付かれないようにしていた私の小さな異変に顧問の先生が気付きます。そして、これまでの日々をやっとのこと打ち明けました。先生はただただ私の話を聞いてくれました。話を聞き終えると「これまでたった一人で辛かったね」とだけ言い、すぐに両親や校長先生に私の思いを伝えて下さいました。その日のうちに作業療法士の先生との面談まで準備して下さったのです。ほどなくして、医師から「起立性調節障害」と診断されました。

これを境に私の生活は一変しました。気遣ってくれる家族。治療してくれる病院の先生、サポートをしてくれる学校の先生や友達。多くの支えを受けな

がら、自分にできることからスタートしました。それでも症状がすぐに改善することではなく、なかなか元の生活には戻れませんでした。

そんな中、「体調がいい時には部活動だけでも参加したらいい」という父の言葉に後押しされ参加した吹奏楽部。重く沈んでいた自分の気持ちがふっと軽く、日に日に明るくなっていくのを感じました。部活動や仲間の大切さを改めて実感しました。すると不思議と私の体調や気持ちは徐々に快方へと向かっていきました。父が病気を抱える私のことを手紙に記し、それを顧問の先生が部員全員の前で読み上げてくれたのだそうです。あとになって聞いた話ですが、私の父と先生は、毎日のように連絡をとりあっていたそうです。家庭でのこと、学校でのこと。常に情報を共有して、私のためにできることは何かを、ずっと考え続けていたのです。

そうして約1年以上が経ち、病気との闘いに終わりがやってきました。中学3年生になる目前でした。

私を病気から救ってくれたもの。それらは、今まで私が気がつかなかっただけで、ずっと前から私のすぐそばにあったものばかりでした。「家族の助け」。私が生まれた時から、いや、生まれる前からずっとずっと私のすぐそばにあったもの。「周りの方々の助け」。健康なときは気付かなかった自分の周りにある力強い支え。起立性調節障害になったことをきっかけに、今まで気付いてこれなかった『何気ない当たり前の日常の中にある大切なこと』に気付ける私になっていました。

皆さん、いつもの日常を新しい視点で見つめ直してみませんか。「当たり前」だと思っていても「当たり前」ではないものが、私たちの日常には溢れているのです。それは実は「当たり前」などではなく「有ることが難しい」つまり「有り難い」ことなのです。

苦しかった経験から私が手に入れた「有り難う」の心。それを忘れる事なく、私はこれから的人生、しっかりと生きていきたいと思っています。

# 国の壁を越えて

栃木市立栃木南中学校 3年

小林 柚輝



「中国は怖いし、嫌だなあ。」

そんな言葉を学校で耳にしたことがあった。そのとき、私は複雑な気持ちのまま、何も言うことができなかった。

私のいとこのお母さん、つまり伯母だが、その伯母は中国人で、私は「ヤン姉ちゃん」と呼んでいる。祖父母の家に行くといとこが来ていることも多く、一緒に遊んだりする。「ヤン姉ちゃん」も一緒に来て、私や私の弟たちの好きな料理を振る舞ってくれる。特に皮も具も一から作る「肉まん」はどこのお店よりもおいしい。どんなに忙しくても「みんな好きでしょ。食べて。」と言って、手の掛かる料理を作ってくれる。そんな「ヤン姉ちゃん」のことが、私は大好きだし、とても素敵だと思っている。

そんな「ヤン姉ちゃん」が生まれ育った国をなぜ怖がるのか、嫌がるのか、私は疑問だった。

あるとき、母から驚くことを聞いた。「ヤン姉ちゃん」が日本に来るとき、「ヤン姉ちゃん」の両親から「日本に行ったら殺される。日本は恐ろしくて怖い国だから。」と言われたそうだ。

中国人にとって日本はそんなふうに認識されていたのかと思うのと同時に、中国の視点から見れば、怖くて嫌だと思われるの日本人なのだということに強い衝撃を受けた。もちろん、そう考えているのは一部の人間なのだろうが、誤解に満ちた情報、偏見に満ちた情報がこの世にあふれかえっている現在、私だって、いつ何時、間違った情報に踊らされるかわからない。そう思うと怖くなる。

今年、クラス替えで、昨年バングラディッシュから転入してきた女の子と同じクラスになった。ふとしたことで、話すようになった。もちろん、日本に来たばかりで、日本語がよくわからない彼女と話す

ときは、片言の英語か、片言の日本語である。それでも、もっと彼女のことを知りたい、彼女の国の文化を知りたいと思い、会話を続けてきた。

今でも、二人の会話は片言だ。何回も聞き返したり、聞き返されたりする。それでも、以前と違ってきたのは、私の中の感覚だ。彼女を外国人として見るのではなく、一人の友人として話をしている。意識してそうしたのではなく、自然とそうなった。彼女と接するうちに、「国は違っても、文化が違っても、感じること、思っていることは同じ。」と気づいたのだ。

美しいものを見て、美しいと感じ、美味しいものを食べて美味しいと感じる。国も文化も関係ない。人にそれぞれ個性はあっても、人間は皆同じなのだ。どんな国の人であっても、「外国人」という枠にとらわれず、一人の人間同士として、お互いを知ろうとし、分かり合おうとすることが大切なのだ。よく知っている人間の母国を悪く言う人はいないだろう。その国の表面だけを見て判断する前に、その国の人々を知り、考える。外国や日本といった国の大壁を越えて、一人の人間として認め合いながら共存できる。日本がそんな社会になることを願っている。

# ありのままの自分

佐野市立城東中学校 3年

マハラジャン でしゅな



私の名前は、マハラジャンでしゅなです。ネパールで生まれました。

皆さん、自信がもてないところはありますか。「何だ急に。」と思われるかもしれません、実は私は、名前にコンプレックスを感じていました。自己紹介や、みんなの前で名前を言う場面。そんなとき、私はいつも不安でたまりませんでした。

小学3年生のとき、クラス替えで自己紹介することになりました。番号順に進む中、私は順番が近くにつれて時間があつという間に過ぎるように感じました。そして、いよいよ自分の番。その瞬間、周りの目が気になり、心がざわつきました。顔が熱くなり、冷や汗が流れ、名前を言うのが怖くなってしまったのです。「他の人と違う。変に思われているかもしれない。」、そう思うと、どんどん自信がなくなり、手を挙げて発言することも減っていきました。名前が言われないよう、避けるようになったのです。

中学1年生になり、私は日本の国籍を取得しました。そのとき、名前を変更できることを知りました。「もう見られなくてすむ。恥ずかしい思いをしなくてすむ。」と思い、名前を変えるつもりでいました。

でも、ふと、考えました。

「私の名前には、どんな意味があるのだろう。」

これまで、名前について深く知ろうとしてこなった私。思い切って、母に聞いてみることにしました。すると、少しの沈黙のあと、母が穏やかに微笑みながら言いました。

「でしゅなという名前には、贈り物、つまりプレゼントという意味があるんだよ。だって、あなたは私たちに贈られた神様からのプレゼントでしょ。」

この言葉に、私ははっとしました。親の思いが込められた願い。そして、大切にされていたという実感。

名前を否定していたことに、申し訳なさがこみ上りました。意味を知ろうとしてこなった自分に、恥ずかしさを感じました。だから、私は決意しました。自分の名前、そして自分自身に、きちんと向き合おう。そう思うと、不思議なくらい気持ちが軽くなり名前が気にならなくなつたのです。

それ以来、私は積極的に行動するようになりました。少しずつ自分に自信が芽生え始めたのです。堂々と、自然体で自己紹介ができるようになりました。母のおかげで、ありのままの自分に戻ることができました。

私の場合は名前でしたが、コンプレックスをもっている人は、私以外にもたくさんいると思います。そんなときこそ、自分を否定せず、知ろうと努力し続けること。それを忘れないでほしいです。そうすることで、少しずつ自分を受け入れ、自分への「好き」が増えています。どんなコンプレックスでも、それも自分の一部です。だからこそ、「ありのままの自分」を隠さずにいてほしいと思います。それは、自分だけのかけがえのない個性。少なくともあなた自身だけは、自分の味方でいてください。なぜなら、どんなあなたも、神様から贈られた大切なプレゼントなのだから。

# 当たり前という幸せ

下野市立南河内第二中学校 3年  
小池杏奈



「あなたにとっての当たり前とは何ですか。」そう尋ねられたら、皆さんはどういうことを思い浮かべるでしょうか。家族と囲むあたたかい食事。友達と笑い合う学校生活。毎日いってらっしゃいと見送ってくれる両親の存在。そのような様々な当たり前があると思います。そして、大多数の人が思い浮かべるのは、明るい何気ない毎日のはずです。それらは多くの人にとって大切な日常の一部ですが、本当に当たり前のことなのでしょうか。

中学2年生の夏、私は広島を訪れました。広島に到着し、私が最初に感じたことは、ここが本当に原子爆弾が投下された場所なのかということです。現在の広島は私が住んでいる街よりもはるかに発展し、私たちと同じような当たり前に満ちていました。そして、ビルが建ち並び、木々の新緑が鮮やかに輝く街の姿は人々の努力と復興力の高さを物語っています。悲惨な戦争の事実を全く感じさせませんでした。しかし、この後に訪れた被爆体験講話や平和記念資料館では、想像以上の原爆の威力を知るとともに、当時の生活の苦しさがよくわかりました。さらに衝撃的だったのは、被爆二世などと表現されるように、直接は被爆をしていなくても、後遺症や差別によって、彼らの「当たり前」が、世代を超えて奪われ続けているという事実でした。この他にも多くの貴重な体験をして、様々なことを学んだ3日間の研修でした。そこで得た経験が、私の考えを大きく変えるきっかけになりました。

私はこれまで、当たり前の価値について、日常の中では一度も考えたことがありませんでした。しかし、この3日間で目にしたものは、平和な生活をしている私たちからは到底考えることのできない光景ばかりで、当たり前が尊いものだということに気づくことができました。また、世界に目を向けてみると、今なお多くの国で戦争が起きています。今、この瞬間もどこかで苦しんでいる人々がいます。尊いいくつもの命が危険にさらされています。このよう

なことを考えれば、家族や友人がそばにいて、学校に通えて、衣食住においても不便のない快適な暮らしがある私たちはどれだけ恵まれていることか。つまり、当たり前の生活を当然のように送っている私たちはとても幸せなのです。こんなにも素晴らしい私たちの毎日だからこそ、もっと一日一日を大切に生きるべきだと、私は考えます。

では、そもそも当たり前とは何なのでしょうか。ふと思いつけてみたところ、「わかりきったいうまでもないこと。当然のこと。」と記されていました。私は、その言葉の意味は理解することができましたが、疑問に思ったことがあります。それは、当然のことなのにその当たり前はなぜ、世界の人々に訪れないのだろうかということです。当然のことなら、当たり前にありふれた生活を全ての人が送っているはずです。それなのに現状としては、当たり前からはほど遠いような生活をしている人が大勢います。このまま、平和に暮らしている風景がなくなり、戦争しているのが当たり前という世界に変わっていってしまうのでしょうか。いいえ。私はそうなってほしくありません。それを防ぐために、私は何事にも感謝の心を持つことが大切だと考えます。例えば、何か特別なことが起これば誰でも感謝します。しかし、何気なく起こっていることこそ、誰かの気配りや愛情によって支えられているのです。周りに溢れている「当たり前」という名の幸せが、かけがえのない宝物だということを知り、感謝することで、新たな出逢いや楽しい毎日が待っているはずです。まずは何気ない日常と身近な人々から感謝してみてことで、一人でも多くの人に平和で笑顔溢れる生活を繋げていきませんか。

# 自分らしく生きる

那珂川町立小川中学校 3年  
板橋璃空



あなたは、自分が好きなものを、胸を張って、「好きだ」と言うことができるだろうか。僕は勉強が好きだ。新しい知識や考え方を身に付けて、自分がレベルアップしていく感じは、楽しい。だが、僕が「勉強が好きだ」と言うと、周りの人が苦笑いをしながら、「お前は真面目だな」と言う顔を見せるのは、仕方のないことなのだろうか。僕はその時から、勉強だけではなく、自分の「好き」を心の中にそっとしまうようになった。なぜ僕達にとって、自分の気持ちを素直に伝えることが難しいのだろう。

日本には、「全ては語らない、察する」文化がある。社会では「空気を読む」とか「忖度」と言う言葉が使われるからだろうか。僕達の過ごす教室でも「それな」とか「あーね（あなるほどね、の意らしい）」という言葉が使われることが少なくない。ただ、そこに意思の主体である「自分」はないような気がする。相手の意見を本当に受け止め、噛み砕いて、自分の気持ちを添えて返そうとする「自分」がいない。百歩譲って自分に言いたいことがあったとしても、相手との衝突を恐れてそれを飲み込んでしまう。このような言葉を繰り返すだけの関係は、まさに表面的な付き合いでしかない。

日本の「察する文化」を否定するわけではない。それはときに必要で、美しくもあるだろう。だがそればかりにとらわれていると、自分の本当に言いたいことは理解されなくなってしまう。そしてこの表面的な関係が続けば、相手そのものを根底から理解できなくなり、いつかは相手を否定することにつながってしまう。思い返せば、僕もいつの間にか、本音で友人と話し合うことができていなかったように思う。

では、一体どうすれば僕たちは、他者と分かり合うことができるのだろうか。そのヒントとなるのが、「オタク」と言われる人たちだと僕は思う。「オタク」はともすると「変わった趣味を持った人」という否定的な意味で括られる事もある。しかしその一方で、

彼らは目を輝かし、自分の好きなものを楽しげに、つまびらかに語る。僕の周りにも、いわゆる「推し活」をしている友人がいる。対象は様々だ。俳優、アイドル、アニメキャラクター・・・周囲の反応を気にして、好きなものが言えない僕にとっては、この姿がまぶしく映る。事実、この「自分に正直になる姿勢」というのは、日本人として、多くの人が見習わなければならぬものではないだろうか。もちろんこれはヒントに過ぎず、誰しもが同じ熱量で好きなものを持つことは難しいだろう。

であれば、僕はこう考える。自分とは違う個性や考えをもっと受け入れていくために、さらに多くの観点から物事を、相手を見てみたらどうだろう。

「ルビンの壺」という絵をご存知だろうか。皆さんはこの絵がどのように見えるだろう。「白いツボ」に見える人もいるし、「向かい合う二人の顔」に見える人もいると思う。この不思議さは、人の個性の捉え方にも通ずる。どの部分に注目するかで、その印象は大きく異なるのだ。

学校の活動で「リフレーミング」という考え方を知った。これは、主にマイナスな見方をプラスに変えるというものだ。これを使うと、例えば「ずうずうしい」人は「堂々としている」ことになるし、皮肉の意味で使われた「マジメ」な僕は、「真剣」で「頑張り屋」な人物にだってなれる。これはどんな性格や特徴においても応用できる、画期的な考え方だと思う。一見「負の側面」として捉えられがちなのも、その人自身の個性であり、面白さなのだ。それに気づくことで僕達は、相手のことを理解し、受け入れることにつながるのではないだろうか。

自分の「好き」や個性を伝え、相手のそれを受け入れることで、僕たち一人ひとりが、自分らしく生きていくことができるはずだ。

これから僕は、「勉強が好きだ」と自信をもって語っていこうと思う。次は皆さんの番だ。あなたの好きなものは、何だろう。

# 人生はビュッフェ

鹿沼市立北中学校 3年  
野 口 聖 香



みなさんは、ビュッフェと聞くと、どのようなイメージをもちますか。さまざまなジャンルの美味しいそうな料理が並び、自分の好きなものを、自分の好きな分だけ食べられる、とても幸せな食事の時間です。ビュッフェには今までに見たことも、食べたこともない料理が並び、少しだけ取って味見することもできます。初めてのことに挑戦するきっかけにもなり、新しい発見に出会う機会にもなります。ここで大切なことは、自分で食べたいものを、自分で決められるということです。また、料理を乗せることができるプレートの大きさには、限界があることもあります。だからこそ、一度に乗せられる量には限りがあるため、何をどのくらい乗せるかを、よく考えなければなりません。このようなことは、私たちの人生にも同じように言えることなのではないでしょうか。

「人生はビュッフェ」という言葉を私が知ることになったのは、あるテレビドラマがきっかけでした。そのドラマは、「人生はビュッフェのようなものである」という発見から物語が前に進んでいきました。

私たちは、さまざまな選択の連続で生きています。その人の今までの経験から価値観が生まれ、何を選択するか決定していくものです。ビュッフェも同じです。一緒に行った人がすすめるお気に入りの料理を、勝手に自分のプレートに盛りつけてきたら、みなさんはどう思いますか。私は自分の食べたいものだけを食べたいのに、勝手に限りのある自分のプレートの一部を浸食されてしまうようで、いい気持ちにはなれません。勝手に他人のプレートに料理を盛り付ける行為は、勝手に価値観を押しつける行為と一緒にです。

価値観とは、人との違いを明確にすることのできる、自分だけのオリジナルプレートです。一人一人違う価値観をもっているので、価値観に正しいも間違いないものではありません。価値観はその人を表す、個性の一部です。だからこそ、自分と価値観が違う人のことを排除したり差別したりすることは、絶対にしてはいけないことです。また、自分が良かれと思って

価値観を押しつけることも、相手の気持ちを考えていらない行動につながってしまいます。

その他にも、人には好き嫌いが存在します。選びたいものが肉か魚か、パンかご飯など、人それぞれ食に対する捉え方が違うのです。私は、言葉の捉え方の違いについて、考えさせられた出来事があります。ある時、友達から「いつもと違ってかわいいじゃん。」と言われました。初めはかわいいと褒められて素直に喜んでいました。しかし、後から「いつもと違って」に引っかかったのです。「いつもと違っていい」という表現には、褒める要素もあれば、けなす要素もあると思います。この言葉をプラスに捉えるか、マイナスに捉えるかは、その人の感じ方の違いによります。これらのことは日常生活のなかでよく起きることであり、それをどう捉えるかを選ぶのは、自分自身なのです。

以上のように、今まで述べてきたことも、ビュッフェと共に通するところがあると考えました。自分が選ぶものは自分で決められるところに、ビュッフェの良さがあるはずです。その選ぶ行為こそが、自分のことを紹介しているようなものになります。

これから私たちは「受験」という人生で初めて大きな選択を迎えることになります。今まで与えられてきた環境の中で、小さな選択を繰り返し、進むべき道を歩んできましたが、中学校を卒業すると、いよいよ選択した人生をそれぞれが歩んでいきます。その時の道しるべとなるのが、今までの経験と、今私たちが頑張って取り組んでいること、さらに、これから選択して経験していくことなのではないでしょうか。その全てが、これから自分の自分を支えてくれる、大きな自信になるはずです。

みなさんは、目の前にある人生というプレートに、なにを選んで乗せていきますか。私は人生を終える頃に、選んできたものが間違いではなかったと胸を張って言えるように、これからもさまざまなことに挑戦し、経験を自信に変え、最後は満足感でいっぱいの人生になるようにしたいです。

# 講評

審査委員長 宇都宮市立若松原中学校  
校長 永井 高穂

本日の県大会では、たくさんの来場者を目の前にして、普段の学校生活とは大きく異なる環境、また雰囲気の中、大変緊張したことと思います。しかし、さすがに各地区代表とあって、自分の思いを伝えようとする姿勢は熱意に溢れ、しっかりと聴衆に伝えようと真摯な態度で臨み、意気込みが伝わってきました。それぞれが自分の考えを持ち、16名の発表者の皆さんには、発表の際の声の出し方、表現する態度、そして主張の内容、いずれも大変立派でした。審査にあたっては甲乙つけがたく、審査員一同大変悩みました。最終的には入賞者を決定いたしましたが、全員の発表は本当に素晴らしく、僅差だったということを申し添えます。

そのような中、最優秀賞の小林心結さんは、大正時代に女性差別からの解放を訴えた平塚らいでさんの言葉に出会い、看護師として女性が公の場で働くことの価値を高めた大関和さんに憧れ、県の防災士会に所属しながら、男女関係なく、あたたかく柔らかな力強い女性として、ひとりの人間としてできることを考えていきたいと表情豊かに訴えました。優秀賞の田中里彩さんは、中学生になって百人一首と出会い、競技かるたに熱中する中で三十一文字の和歌の言葉の持つ偉しさに気づき、現代のコミュニケーションと比較し、表現が豊かな日本語を大切にし、言葉に想いをこめて使っていきたいと述べました。同じく優秀賞の高久桃さんは、曾祖母の介護から、社会や世の中で、介護の仕方に不安を抱えている人たちが介護について教えてもらえることで、もっと助け合える世の中をつくれるのではないかと訴えました。また、同じく優秀賞の繩田美叡さんは、大切な人たちが病と闘う姿を目にし、若い医師たちの言葉に医療の道を目指す思いをさらに強くするとともに、今学んでいることはすべて力になることに気づき、今、命を守るために戦いに最大限の力を発揮できる医師になりたいと発表しました。このほかの皆さんもそれぞれが大変立派な発表で、私たちに感動を与えてくれました。ありがとうございました。

さて、今年は大阪関西万博が開催されました。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」です。皆さんの主題を聞いていて、そのテーマと重なる部分がたくさんあり、未来を描く力がすでに皆さんの中にあると感じました。人とのつながりを大切にする思いは「多様性の尊重」や「国際理解」につながります。自分の夢や将来について語った発表は、「未来への希望」と「挑戦する姿勢」を表しています。さらに、身近な問題に気づき、「なぜ？ どうして？」と問いをもち、変えていこうとする姿勢は、「持続可能な社会を作る力」に他なりません。今日の皆さんの主張は、一人ひとりが未来を描く、「小さな万博」といえるものでした。どうかこの経験を力にして、自分の未来を輝かせてほしいと思います。

これらの将来の予測が困難な、複雑で変化の激しい社会の中で、皆さんには今後も豊かな感性を磨き、広い視野を持ち、時に立ち止まって、課題解決のための自分の考えをしっかり持ってより良い社会を築いていってほしいと願っております。

最後になりましたが、本大会開催に御尽力下さった関係者の皆様、生徒を温かく応援してくださった御家族の皆様、そして地区予選も含めてお忙しい中、生徒へきめ細かに御指導くださいました、各学校の先生方に心より感謝申し上げまして、講評といたします。

# 高校生ボランティア感想



鶴田 一遙

昨年度に続き、今年度も高校生ボランティアとして大会に参加させていただき、大変貴重な経験となりました。今年度は担当する業務の幅が広がり、普段はあまり交流のない他校の高校生と協力して活動する中で、新たな学びや気づきがあり、充実した一日となりました。

中学生のみなさんは、力強い眼差しと表情で自分の言葉を精一杯届けようとしており、その姿に胸を打たれました。社会問題と真剣に向き合う姿勢に、私自身も大きな刺激を受け、日々の生活の中で見過ごしがちな課題に目を向け、自分にできることを考えていきたいと感じました。

そして、2年連続でこの大会に関わる機会をいただけたことに感謝するとともに、一緒に大会を支えてくれた高校生ボランティアのみなさんにも、心からありがとうございます。



横塚 彩芽

去年に引き続きボランティアに参加させていただきましたが、今年は司会だけでなく、受付、会場準備など様々な仕事をさせていただきました。

今年はボランティアの人数が増え、全員が一丸となって協力することで、細かいところまで気を配ることが出来ました。

2年目と言うこともあり臨機応変に対応できたのではないかと思っています。

また、普段なら聞く機会のない発表者の方々の主張を聞き、自分では気がつかなかったこと、新しい発見などがあり、とても有意義な時間でした。

ボランティア活動に参加した方が良い、将来の選択肢が広がるとよく言われていますが、去年、今年のボランティア活動を通して仕事の体験という面だけでなく、やりがいや楽しさなど様々な発見がありました。

貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。



佐藤 凪紗

私は、「第48回少年の主張県大会」のボランティアに参加して、自分の活動が大会に貢献していることを実感することが出来ました。

事前の準備では、会場を作り、アナウンスの確認を行いました。発表者として舞台に立った時は、自分の感情を表現するような喋り方でしたが、今回のアナウンスは、司会として正確に内容を伝えられるような喋り方を練習して、そのスキルを身につけることが出来ました。また、予定していた動きと当日の動きが変更するところがあった時に、素早く対応している職員の方々の姿を見て、臨機応変に行動できる力は大切だと感じました。

当時は自分が主張を発表することだけで精一杯でしたが、大会を支える側で参加してみて、この大会は、ボランティアや職員の方々の沢山の人に支えてもらっているからこそ、私達にとって思い出に残る場所などと気づきました。また、様々な高校の方と共にボランティアを行い、交流を深めることができました。今回このような機会を与えていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

この経験で得た学びを忘れずに、今後の生活に活かしていきたいです。



高崎 愛梨

私は今年の少年の主張のボランティアを通して、沢山の経験や得られるものがありました。

去年私が参加した時には、自分の発表で頭がいっぱいでした。しかし今回学生ボランティアをすることで、自分の発表の裏でこんなにもたくさんの人が、準備してくれていたんだとても驚いたと同時に感謝の意を伝えたいとも思いました。また、皆さんの主張を聞き、去年とは違う主張の内容は、興味深いと感じました。

また、この学生ボランティアでは、かけがえのない他校の友達を作ることが出来ました。去年一緒にステージに立った顔見知りは、いつの間にか友達と呼べる仲になれました。そして、そんな友達とこうしようあれ

しようなど、話し合い考え方などを決め、一緒に出来てとても貴重な経験になりました。

この学生ボランティア活動で得られた経験で、これからたくさんのこと経験していくらいいなと思いました。



### 滝田 帆香

私が今回、少年の主張のボランティアをしてまず初めに思ったことは、また少年の主張に関わることができるという喜びと、本当に私がやって大丈夫かという不安でした。私は今回のボランティア活動に興味がありました、日常会話で友達や家族から早口であることの指摘や他のボランティアの人達とうまく協力できるか不安でした。

ですが、打ち合わせや準備を通して不安は徐々になくなっていました。きっと、他のメンバーが一生懸命な姿を見て鼓舞されたからでしょう。

迎えた本番当日、どこか懐かしい思いが蘇りつつ別の不安に襲われました。

それは大勢の人の前で何か粗相をしてしまわないかの不安でした。誰しも緊張するであろう司会の仕事、当日私は焦ってしまいましたが進行を務められました。

自分達は司会の他に来賓の方や副知事さんの案内、会場設営などを行いました。手分けしていましたがスタッフさんの苦労を身をもって知ったと思っています。

今回のボランティアを通じて思ったことは、やれる時に貴重な体験をした方が良いということです。司会の経験やイベントの舞台裏に携わる経験なんて、この先下手したら無いような経験です。だから、自分にとって好機だと思って申し込みました。

これを読んでいる皆さんも今しか出来ない事を大切にしてみて下さい。



### 山本 芽生

発表の舞台を作っていく時に、この舞台に立ってからもう1年が経ってしまったことを実感しました。昨年度の発表が自分の人生にとっての大きな思い出となったからこそ、今年は運営する側として携わることができ、大変嬉しく思います。なによりこの大会のボランティアで、とても素敵なお6人と出会うことができました。きちんと自分の意見を言って、分からぬところは教えて、率先して動く、この大会をより良いものにできる最高のメンバーでした。そして発表本番。これまで幾度となく大変なことがあって、ただその度に頑張ってきたということがわかる顔つき、普段声にすることが出来ない、心に渦巻く様々な感情を堂々と言葉に乗せる皆さんの姿に胸を打たれました。これからどんな人間に成長していくのだろうか、そして私はどうなりたいのか、自分に問いかけながらまた、成長できた1日となりました。私はこれからも人生に悩みもがきながら、自分なりの道を進んでいきたいと思います。この大会に再びボランティアとして関わることができて、本当に良かったです。ありがとうございました。



### 蛇澤 奏太

少年の主張は自分を大きく成長させてくれた思い入れのある大会です。そのような大会にまた関わるのならと思い、今回はボランティア参加を決意しました。

事前打ち合わせから始まり、会場設営、受付業務、司会と様々な仕事をしていく中で、昨年は知り得なかった大会の裏側を知ることができました。そして、そこには多くの運営スタッフの皆さんのが力があり、それによってこの大会が成り立っていることを改めて強く感じました。今回、自分もその一員として活動できたことは、間違いなく貴重な経験であり、自分にとって大きな価値があることであったと思います。

世の中には「やってみないと分からないこと」が沢山あると思います。僕は、ボランティア活動をやってみたことで、多くのことを学ぶことができ、また、中学生の皆さんの主張を聞いて、自分が今まで持っていた新たな視点に気付くことができました。その事によって、また一つ成長できた気がします。これからの生活でも、自分に与えられた機会を逃さず、積極的に挑戦していきたいと思います。なぜなら、そこにはきっと「やってみないと分からない何か」があるはずだからです。もちろん、来年度も機会があれば、この少年の主張ボランティアに是非参加したいです。

# 県 大 会 の 概 要

●目的 県内の中学生が日常生活の中で感じていることや考えていることを発表することにより、若者としての誇りと自主性を育てるとともに、広く社会に訴えることにより、同世代の少年の意識の啓発及び青少年の健全育成に対する大人の理解と関心を深めることを目的とする。

●発表内容 発表内容は、概ね次の各号のいずれかに該当し、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークな発想と飾り気のない言葉でまとめたものとする。

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）又は身の回りや友だちとの関わりなど。
- (3) テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会のさまざまな出来事に対する意見や感想、提言など。

●実施日 令和7年9月20日（土）13：00開会

●会場 栃木県総合文化センター サブホール

●主催 栃木県・栃木県教育委員会・栃木県青少年育成県民会議 ((公財) とちぎ未来づくり財団)  
独立行政法人国立青少年教育振興機構

●共催 栃木県更生保護女性連盟

●後援 栃木県中学校長会・栃木県PTA連合会・(一社) 栃木県子ども会連合会・NHK宇都宮放送局・(株) 下野新聞社・(株) 栃木放送・(株) エフエム栃木・(株) とちぎテレビ

●発表者 発表者は、8つの地区で下記の表により代表を選出する。

前年度の各地区応募校数	各地区代表者
15校以下	1名
16～25校	2名
26校以上	3名

●審査委員 審査委員は、次の関係行政機関及び団体等から推薦のあった10名に委嘱する。

- ・栃木県市町村教育委員会連合会
- ・栃木県私立中学高等学校連合会
- ・(株) とちぎテレビ
- ・栃木県教育委員会事務局義務教育課
- ・栃木県更生保護女性連盟
- ・栃木県青少年育成県民会議 ((公財) とちぎ未来づくり財団)
- ・栃木県中学校長会
- ・(株) 下野新聞社
- ・栃木県生活文化スポーツ部県民協働推進課
- ・栃木県教育委員会事務局生涯学習課

●表彰等 (1) 最優秀賞 (栃木県知事賞) 1名※全国大会に推薦  
(2) 優秀賞 (栃木県教育委員会教育長賞) 3名  
(3) 奨励賞 (栃木県青少年育成県民会議理事長賞) 12名

## ●審査基準 1 採点について

次の2分野について採点する。

- (1) 論旨・内容 (2) 論調・表現

### 2 採点上の観点、留意点

- (1) 論旨・内容 (事前審査)

- ア 中学生らしい鋭い感性で、新鮮な主張であるか。
- イ 新しい情報や視点があるか。
- ウ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
- エ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
- オ 論旨が一貫し、構成がしっかりとっているか。

- (2) 論調・表現 (当日審査)

- ア 話しぶりに熱意と迫力があるか。
- イ 聴衆に共感と感銘を与えていたか。
- ウ 説得力のある話し方であるか。
- エ 落ち着いて、話していたか。

### 3 発表時間の過不足による減点

持ち時間5分に対して1分以上の過不足があった場合は、  
「論調・表現」から減点する。

(補足)

- ・事前の作文による審査を「論旨・内容」の審査とし、当日の審査は、原則として「論調・表現」とする。
- ・入賞者は審査委員会の協議により決定する。

## 第48回栃木県少年の主張発表県大会審査委員（敬称略）

栃木県市町村教育委員会連合会市教育長部会副会長（宇都宮市教育委員会教育長）

小堀 茂雄

栃木県中学校長会代表（宇都宮市立若松原中学校長）

永井 高穂

栃木県私立中学高等学校連合会理事（白鷗大学足利中学校長）

青木 凡枝

（株）下野新聞社取締役 デジタル統括副本部長

岩村由紀乃

（株）とちぎテレビ報道本部長

手島 隆志

栃木県生活文化スポーツ部次長兼県民協働推進課長

松本 正

栃木県教育委員会事務局生涯学習課長

上嶋 桂子

栃木県教育委員会事務局義務教育課副主幹

高橋 功昌

栃木県更生保護女性連盟副会長

遠藤 順子

（公財）とちぎ未来づくり財団常務理事兼事務局長

野中 正知

# 第48回栃木県少年の主張発表大会 実施状況

○地区大会：県内を各健康福祉センターごとの8地区に分け、地区内に所在する各中学校が校内発表会等を経て選出した学校代表者（各校1名）により実施した。

地 区	日 時	会 場	応募者	発表者	学年内訳		
					1 年	2 年	3 年
河 宇	8月26日(火) 10:00～	パルティ とちぎ男女共同参画 センター	1,903	29	0	0	29
上都賀	8月25日(月) 13:10～	日光市 大沢公民館	2,143	21	0	1	20
芳 賀	8月21日(木) 13:00～	真岡市 KOBELCO真岡 いちごホール	1,574	16	0	0	16
下都賀	8月21日(木) 12:00～	野木町 エニスホール	3,240	33	0	0	33
那 須	9月4日(木) 12:30～	那須町 文化センター	556	21	0	0	21
安 足	9月2日(火) 12:30～	足利市あしかが フラワーパーク プラザ	1,451	22	0	0	22
塩 谷	8月29日(金) 13:50～	栃木県庁 塩谷庁舎	222	8	0	1	7
南那須	9月11日(木) 14:00～	那須烏山市 南那須公民館	99	5	0	0	5
合 計			11,188	155	0	2	153

○県大会：各地区大会において選出された地区代表者により実施した。

日 時	会 場	大会参加者等	発表者	学年内訳		
				1 年	2 年	3 年
9月20日(土) 13:00～	栃木県総合文化センター サブホール	208	16	0	0	16

# これまでの県大会

回数	開催日	会 場	発表者数	地区大会	
				参加校数	応募者数
第1回	昭和53年11月28日	宇都宮市立旭中学校	16		
第2回	昭和54年10月4日	宇都宮市立陽北中学校	16	158	
第3回	昭和55年7月29日	栃木会館 小ホール	16		
第4回	昭和56年9月22日	宇都宮市立旭中学校	16	164	
第5回	昭和57年10月1日	宇都宮市立旭中学校	16	169	
第6回	昭和58年10月4日	宇都宮市立陽西中学校	16	168	
第7回	昭和59年10月4日	宇都宮市立陽北中学校	16	171	
第8回	昭和60年10月3日	宇都宮市立陽西中学校	16	171	
第9回	昭和61年9月30日	宇都宮市立陽北中学校	16	173	
第10回	昭和62年9月29日	宇都宮市立陽西中学校	15	176	
第11回	昭和63年9月29日	宇都宮市立旭中学校	16	175	
第12回	平成元年9月27日	宇都宮市立陽北中学校	16	179	
第13回	平成2年9月26日	宇都宮市立陽西中学校	16	179	
第14回	平成3年9月26日	宇都宮市立旭中学校	16	181	
第15回	平成4年9月25日	宇都宮市立陽西中学校	16	182	
第16回	平成5年9月21日	宇都宮市立陽北中学校	16	186	
第17回	平成6年9月27日	宇都宮市立旭中学校	16	185	
第18回	平成7年9月26日	宇都宮市立陽西中学校	16		
第19回	平成8年10月1日	宇都宮市立陽北中学校	16	183	
第20回	平成9年10月30日	宇都宮市立旭中学校	16	185	
第21回	平成10年9月25日	宇都宮市立陽西中学校	16	183	
第22回	平成11年9月28日	宇都宮市立陽北中学校	16	182	
第23回	平成12年10月3日	宇都宮市立旭中学校	16	183	
第24回	平成13年10月2日	栃木県教育会館 大ホール	16	183	
第25回	平成14年9月28日	とちぎ健康の森 講堂	16	182	
第26回	平成15年9月20日	とちぎ青少年センター 多目的ホール	16	179	32,356
第27回	平成16年9月18日	とちぎ青少年センター 多目的ホール	16	178	24,978
第28回	平成17年9月17日	とちぎ男女共同参画センター パルティホール	16	173	26,872
第29回	平成18年9月16日	とちぎ男女共同参画センター パルティホール	18	174	24,788
第30回	平成19年9月22日	とちぎ男女共同参画センター パルティホール	17	172	21,497
第31回	平成20年9月20日	とちぎ男女共同参画センター パルティホール	18	172	21,160
第32回	平成21年9月18日	とちぎ男女共同参画センター パルティホール	18	173	22,013
第33回	平成22年9月18日	とちぎ男女共同参画センター パルティホール	18	166	19,909
第34回	平成23年9月17日	とちぎ男女共同参画センター パルティホール	17	169	20,961
第35回	平成24年9月29日	とちぎ男女共同参画センター パルティホール	17	167	19,730
第36回	平成25年9月21日	栃木県総合文化センター サブホール	16	168	17,911
第37回	平成26年9月27日	栃木県総合文化センター サブホール	16	170	19,556
第38回	平成27年9月19日	栃木県総合文化センター サブホール	16	170	19,356
第39回	平成28年9月24日	栃木県総合文化センター サブホール	16	170	19,235
第40回	平成29年9月23日	栃木県総合文化センター サブホール	16	167	18,966
第41回	平成30年9月22日	栃木県総合文化センター サブホール	16	165	16,705
第42回	令和元年9月21日	宇都宮市文化会館 小ホール	16	165	15,549
第43回	令和2年9月19日	栃木県総合文化センター サブホール	16	161	12,140
第44回	令和3年9月18日	栃木県総合文化センター サブホール	16	162	13,542
第45回	令和4年9月17日	栃木県総合文化センター サブホール	16	161	12,337
第46回	令和5年9月16日	栃木県総合文化センター サブホール	16	159	12,323
第47回	令和6年9月21日	栃木県総合文化センター サブホール	16	157	12,566

# 県大会歴代最優秀賞者

回数	中学校	学年	氏名	全国大会の記録
1	田沼町立西中学校	3年	山本 美奈子	
2	塩谷町立大宮中学校	3年	小堀 芳広	第1回全国大会 総理府総務庁長官賞受賞
3	宇都宮市立旭中学校	3年	田村 宏治	
4	栃木県立盲学校中等部	1年	潮田 祐子	
5	佐野市立城東中学校	3年	松本 由紀子	第4回全国大会 内閣総理大臣賞受賞
6	宇都宮市立星が丘中学校	3年	福田 寿美江	第5回全国大会 総理府総務庁長官賞受賞
7	真岡市立真岡中学校	3年	中村 博	
8	足利市立第二中学校	3年	鈴木 博康	
9	佐野市立北中学校	3年	堤 裕美子	
10	烏山町立境中学校	3年	小室 淳子	
11	黒磯市立厚崎中学校	3年	市川 真紀	
12	氏家町立氏家中学校	3年	小野 和美	
13	茂木町立須藤中学校	3年	生井 めぐみ	
14	今市市立今市中学校	3年	小林 知子	
15	足利学園中学校	3年	永島 聖子	
16	矢板市立片岡中学校	3年	小林 俊雅	
17	作新学院中等部	3年	高内 めぐみ	第16回全国大会 総務庁長官賞受賞
18	矢板市立矢板中学校	3年	大串 美雪	
19	氏家町立氏家中学校	3年	平石 友紀	
20	南河内町立第二中学校	3年	金清 舞子	
21	黒磯市立高林中学校	3年	飯田 まりさ	
22	西那須野町立西那須野中学校	3年	松林 朝子	第21回全国大会 内閣総理大臣賞受賞
23	真岡市立中村中学校	3年	深野 志おり	
24	宇都宮市立星が丘中学校	3年	趙 韓知	
25	栃木市立東陽中学校	3年	川野 裕佳	
26	今市市立東原中学校	3年	斎藤 静香	
27	真岡市立真岡中学校	3年	菱沼 優希	第26回全国大会 審査委員会特別賞受賞
28	馬頭町立馬頭東中学校	3年	佐藤 雅俊	
29	日光市立三依中学校	2年	本澤 理沙	第28回全国大会 青少年育成国民会議会長奨励賞受賞
30	那珂川町立馬頭中学校	3年	小堀 美香	
31	佐野市立西中学校	3年	上岡 あかり	
32	上三川町立明治中学校	3年	菅又 拓実	
33	茂木町立中川中学校	3年	石河 智浩	
34	那須町立那須中学校	3年	高久 瑠光	第33回全国大会 奨励賞受賞
35	芳賀町立芳賀中学校	3年	塘内 エリカ	
36	那須烏山市立烏山中学校	3年	須山 優菜	
37	栃木市立栃木西中学校	3年	カリニヨ カーロマリオン	第36回全国大会 奨励賞受賞
38	さくら市立喜連川中学校	3年	石塚 千夏	
39	さくら市立喜連川中学校	3年	高瀬 樹	第38回全国大会 奨励賞受賞
40	鹿沼市立西中学校	3年	上吉原 由佳	
41	矢板市立泉中学校	3年	神立 千星	
42	下野市立南河内第二中学校	3年	星 優莉香	
43	大田原市立金田北中学校	3年	荒井 千恵理	第42回全国大会 文部科学大臣賞
44	鹿沼市立東中学校	3年	石田 真愛	
45	大田原市立親園中学校	3年	阿久津 結花	第44回全国大会 国立青少年教育振興機構理事長賞
46	宇都宮市立宝木中学校	3年	星野 みおり	
47	高根沢町立北高根沢中学校	3年	岡本 智尋	

## 全国大会内閣総理大臣賞

# 伝える

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を三度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まつばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音することができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取りきることもできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」とい

鳥取県

鳥取市立桜ヶ丘中学校 3年  
谷口 鉄馬

う言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。母は「鉄馬は可哀想な子じゃない!」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまってごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だ」としか返せなかつたけれど、両親にとても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのことをしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうに、お金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学1年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけど、人を感じさせる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。  
「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。



済生会宇都宮病院看護専門学校

<https://saimiya-kango.ac.jp/>



(栃木県済生会) 宇都宮病院 看護専門学校 訪問看護ステーションほっと 宇都宮乳児院 高齢者ケアセンター

あなたの大学進学を応援します。

# 給付型奨学金 公益財団法人飯塚毅育英会

■大学奨学生の応募資格は栃木県内の高校3年生

■奨学金は月額60,000円(年額720,000円)、4年間給付、返還不要



公益財団法人飯塚毅育英会 〒320-8644 宇都宮市鶴田町1758番地(株)TKC内  
TEL:028-649-2121 URL:<https://www.iizuka-takeshi-ikuei.or.jp/>

当育英会の創立者飯塚毅氏は株式会社TKC(東証プライム市場:証券コード9746)の創業者です。  
株式会社TKCの配当金が奨学金の原資です。

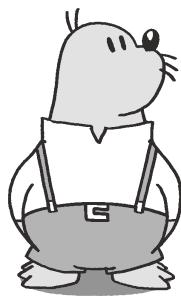
株式会社TKCは、大卒者に加えて、高校新卒者をシステムエンジニアとして毎年15名~20名採用しています。(呼称:クラウドエンジニア)

TKCには大学卒業資格(学士)の取得を会社が支援する制度があり、クラウドエンジニアは働きながら大学にも通えます。大学の費用は会社が全額負担しています。

働く&学ぶ  
可能性、無限大

**TKC**

<https://www.tkc.jp/company/>



**130<sup>th</sup>**  
SINCE 1895

あなたの夢の、いちばん近くで。

足利銀行

国際標準規格 ISO27001・9001・14001 認証取得

-事業内容-



- ビル総合管理、総合メンテナンス
- 一般・産業廃棄物収集運搬業(登録)
- 警備業(登録)
- 業務請負(学校給食、受付・宿直業務他)
- 保存庫「快蔵くん」製造販売
- 鮮度維持機「いきいきくん」製造販売
- IT事業(福祉・医療機関業務支援)
- 福祉サービス第三者評価事業
- 指定管理者受託業務(図書館、他)

ビル総合管理  
株式会社 **大高商事**

本 社 〒320-0075 宇都宮市宝木本町1474番地5

TEL 028-665-1911 FAX 028-665-1919

<https://daikoh.inc>

支 店 東京・小山

営業所 佐野・真岡・今市・県北・県南・小山

**宇都宮記念病院**

社会医療法人 中山会

人間ドック・健康診断

宇都宮市大通り1-3-16  
028-622-1991  
[www.nakayamakai.com](http://www.nakayamakai.com)  
0570-077831

人間ドック  
健康診断の  
お申込みは  
こちらから

**join us**

for the  
SMILE 街と人を、もっと笑顔に。

# KSK環境整備株式会社

〒321-0973 栃木県宇都宮市岩曽町1333 TEL.028-664-3711(代) FAX.028-663-4011

<https://www.kankyouseibi.co.jp>

作新学院 大学

作新学院大学女子短期大学部

SAKUSHIN GAKUIN UNIVERSITY

作新学院大学 経営学部（経営学科・ITマネジメント学科）  
人間文化学部（発達教育学科・心理コミュニケーション学科）  
大学院 経営学研究科 博士（前期・後期）課程・心理学研究科 修士課程  
作新学院大学女子短期大学部 幼児教育科  
※2026年度より男女共学化・名称変更「作新学院大学短期大学部」（届出済み）

<https://www.sakushin-u.ac.jp>

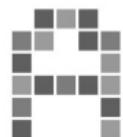
Make Your Future Shine.

文星芸術大学 BUNSEI UNIVERSITY OF ART 美術学科

「美大生活」をポスト中。 X @bunseidaigaku

〒320-0058 栃木県宇都宮市上戸祭4-8-15 Tel: 028-625-6888

# 足利大学附属高等学校



自分の「好き」を積み上げよう！

普通科／総合工学科／情報処理科



## ～ 穏健質実なる女子教育～



### 足利大学附属女子高等学校

(旧足利短期大学附属高等学校)

普通科一括募集

2年次より3つのコースから選択

- ・アドバンス進学コース
- ・こども教育進学コース
- ・ヒューマンケア進学コース

今年創立  
100周年を  
迎えます

## ～「夢」へのチャレンジ～Catch Your Dream

「夢から始まる未来が、ここにある」



### 宇都宮短期大学附属高等学校

(普通科・生活クリエイト科・情報デザイン科・調理科・音楽科)

〒320-8585

栃木県宇都宮市睦町1-35 028-634-4161



## 宇都宮文星女子高等学校



未来を つくる、いきる ちから。

ICT活用と探究学習を通じて自律力・協働力・創造力を育てます。

秀英特進科・普通科・総合ビジネス科



君の本気が国柄にある



「Enjoy your youth」

## 國學院大學栃木高等学校

【普通科】特別選抜S／特別選抜／選抜／文理

〒328-8588 栃木県栃木市平井町 608 番 TEL0282-22-5511(代表)



「作新民。」その“人間力”で、世界を変える、未来をつくる！

# 作新学院

高等学校(トップ英進部・英進部・総合進学部・情報科学部)／中等部／小学部／幼稚園



[HPはこちら](#)



叶えたいため未来はここから始まる！

日本大学 372 名合格 (令和7年4月1日)

- 国公立大学 37 名合格  
東北大、群馬大(医)、筑波大学 等
- 日本大学以外の難関私立大学等 180 名合格  
早稲田大、GMARCH 上理、津田塾大、東京薬科大 等

現役合格率  
**98.5%**

「自分らしく」「自分で選ぶ」新しい自分に出会うクラス制！  
 αクラス/特別進学(T)クラス/スーパー進学(S)クラス/N進学(N)クラス

佐野日本大学高等学校




SEIRANTAITO きっときみを輝かせる

# 青藍泰斗高等学校

普通科 総合ビジネス科 総合生活科

特別進学コースでは国公立大学を目指します

青藍泰斗高校 HP [QR code](#) | [Instagram](#) [QR code](#) | TEL 0283-86-2511  
 E-mail [info@seirantaito.ed.jp](mailto:info@seirantaito.ed.jp) URL <http://www.seirantaito.ed.jp>  
 所在地 〒327-0501 栃木県佐野市萬生東2-8-3



PLUS ULTRA  
さらに向こうへ

普通科 特別進学コースSクラス/特別進学コース/  
進学コース/総合進学コース

白鷗大学足利高等学校

[HPはこちらから](#) [QR code](#)



Pride.  
2025

# ONE STEP BEYOND

人生を強くする文星

文星芸術大学附属高等学校

T320-0865 栃木県宇都宮市睦町1-4 TEL 028-636-8585 FAX 028-633-2321 [www.bunsei.ed.jp](http://www.bunsei.ed.jp)



— 未来を変える、星になる。 —

星の杜は21世紀型教育を実践し、  
「チェンジメーカー」を育成します。

**星の杜中学校・高等学校**

T 321-3233 栃木県宇都宮市上篠谷町 3776 番地  
入試課 / マーケティングチーム 028-667-0700

HPはこちら 



## ～夢と未来を育む～

「個性や特長を伸ばすより良い教育環境がここにはある」



### 矢板中央高等学校(スポーツ科、普通科)

T 329-2161

栃木県矢板市扇町2丁目 1519 番地

電話 : 0287-43-0447 URL : <https://yaitachuo-h.ed.jp>



## 未来づくりは人づくり

“青少年の健全育成”と“県民文化の振興”を目指します

### 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団

「とちぎ未来づくり財団」は、次の施設の管理運営を行っています。

- 栃木県総合文化センター
- 栃木県立とちぎ海浜自然の家
- 栃木県埋蔵文化財センター

- コジマ子どもサイエンスパーク  
(栃木県子ども総合科学館)
- 栃木県立なす高原自然の家

T 320-8530 栃木県宇都宮市本町1番8号 (栃木県総合文化センター内)

電話 : 028-643-1011 FAX : 028-650-5284

URL : [https://www.tmf.or.jp](http://www.tmf.or.jp) E-mail : [tmf@tmf.or.jp](mailto:tmf@tmf.or.jp)

(注) 栃木県私立中学高等学校連合会加盟校につきましては、50音順に掲載しています。

### 令和7年度 第48回栃木県少年の主張発表県大会記念文集

発行日 令和8年1月15日

編集・発行 栃木県青少年育成県民会議

(公益財団法人とちぎ未来づくり財団 青少年育成課)

T 320-8530 宇都宮市本町1-8 栃木県総合文化センター内

TEL 028-643-1005 FAX 028-650-5284

毎月第3日曜日は



ふれあい育む  
家庭の日

後援 栃木県中学校長会 栃木県PTA連合会 (一社)栃木県子ども会連合会  
**NHK**宇都宮放送局 (株)下野新聞社 (株)栃木放送 (株)エフエム栃木  
(株)とちぎテレビ